



TITLE:

財閥的大コンツエルンに就て

AUTHOR(S):

大塚, 一郎

CITATION:

大塚, 一郎. 財閥的大コンツエルンに就て. 経済論叢 1940, 50(1): 131-139

ISSUE DATE:

1940-01

URL:

<https://doi.org/10.14989/131338>

RIGHT:

會學濟經學大國帝都京

叢論濟經

號一第 卷十五第

月一年五十和昭

論叢

波動內在性の分析……………文學博士 高田 保馬

東亞綜合體の原理……………經濟學博士 谷 口 吉 彦

時論

華興商業銀行券の機能……………經濟學士 德 永 清 行

研究

ナチス社會主義に於ける勞働觀……………經濟學士 中川與之助

ドイツ封建制_{於ける末期に}保險機構の變容……………經濟學士 佐 波 宣 平

下請制工業に於ける最近の變化……………經濟學士 田 杉 競

聖トマスの法と愛について……………經濟學士 澤 崎 堅 造

說苑

財閥的大コンツエルンに就て……………經濟學士 大 塚 一 朗

附錄

彙報

外國雜誌論題

説苑

財閥的大コンツエルンに就て

大塚 一朗

一 序 言

現代の我國産業の決定的重要部分は三井、岩崎、住友及び其の他の少數金權的家族を各別に夫々の中心の基盤とせる幾つかの網狀結合的大規模企業集團の一群がこれを擔當してゐる。茲に現代の我が國民經濟殊に産業の基本的性格の一面が存してゐる。以下に於て私は、かくの如く巨大金力の契機によつて我が國の經濟及び社會の上に支配的勢力を占めたる特殊の世襲的家族體系若くは金權的大家門ともいふべきものが核心的要素になつて構成されてゐるところの結合的大規模企業集團に關して若干の考察を試みようと思ふ。蓋し、

財閥的大コンツエルンに就て

現代我が國の産業組織殊にコンツエルン現象の問題の理解に幾分の寄與を齎し得たいと思ふのである。

二 コンツエルン概念に

於ける一般的要素

コンツエルン (Konzern, Concern) とは、もとこれ、現代の諸國經濟社會に發達したる或る種の企業結合體系のことを指稱する意味を以て獨逸の俗間に於て自然的に普及し來れる一つの通用語であり、今ではそれが我が國に於ても非常に廣く俚耳に慣れたる言葉になつてゐることは周知のところである。しかし、學術上に於ける此の語の正確にして詳密なる意義如何といふことになれば、其の答は必しも容易でない。諸國の學者がこれに就て考究し、殊に此の語のいはゞ本國たる獨逸ではコンツエルン概念の科學的確定に就て種々なる努力が試みられ、文獻上には既に十幾つものコンツエルン概念が見えてゐるのであるけれども、嚴密にいふならばその中の孰れもが未だ通説として受取られる迄に

は熟してゐない¹⁾。而して、此の問題に關する各説間の不一致又は論争に於ける最も重要な點は、コンツェルンの企業結合體系の形成目的、ならびに『コンツェルン』と『トラスト』との異同如何に關する見解を繞つて現はれてゐるのである。

しかし、それら各説間の異同に關する嚴密の辨別乃至批判の追求を姑く措いていふならば、學說上に現はれてゐる術語『コンツェルン』に一般的に附着してゐる共通的概念要素ともいふべきものが見出され得ないではないのである。それは凡そコンツェルン概念が一般に、複數企業が未だ法制的乃至は名目的關係上に於ける自己の獨立的存在性を失はざる状態を維持しながら、各自の實質に於ける何等かの本質的契機を通じて貫く基本的共同性(投下資本の決定的部分に對する實質的支配關係の共同性、企業損益に就ての計算の共同性、企業管理機關に於ける人的要素の共同性等)を基礎にして、夫々の業務活動の一部又は全部に涉つて、其の上に直接乃至間接の總括的、統一的管理状態を展開してゐるといふ事

情を含むといふことである。

かくの如き一般的要素に對して更に、複數企業間の基本的共同性の内容の具體的規定や或はコンツェルンの結合形成の目的の規定やに關する議論又は考察が附け加へられることによつて、それが原因でコンツェルン概念に就ての見解の相異が生じて來る。又たとへ或る一人が何らかの上位的なコンツェルン概念一般を確定してゐても、それが高度の抽象性のものである限り、それに基づいてコンツェルン問題の具體的研究が進められる場合には、勢ひ必然に下位概念としての各種の特殊コンツェルンを規定せねばならなくなるであらう。しかし、それはともかくとして、此の行論に於ける順序としては、ここにコンツェルン概念の構成に就ての私見を述べて置かねばならない。それに就き、私は先づ一應、高度抽象的な廣義コンツェルン一般の概念を立てるのである。私は、複數企業が法制關係的にその獨立的存在性を維持しながら夫々の企業活動の實質に於ける基本的契機²⁾(資本支配力、現業管理權、損益計算)

1) Cf. Piotrowski, R., Cartels and Trust, 1933, p. 53.

2) Cf. Berle, A. and Mean, G., 1936, p. 119.

の一又はその全部を貫く共同性を基礎にして内面的關係から（即ち國權的行政作用等の外部的基礎に依つてではなく）、其の業務活動上に何等かの程度の總括的、統一的管理狀態を展開してゐることが、コンツエルン一般の概念を可能ならしむる爲に必要且つ充分なる要素であると見るのである。かくて、初めに指摘したやうな、現に我國經濟上重要な地位を占めてゐるところの、金權の豪族を中心としての結合的大規模企業集團は、右の見地から確にこれをコンツエルンの範疇に所屬せしめなければならない。しかし、かかるコンツエルン現象を更に其の内容に立ち入つて具體的に検討するならば、そこに得られる種々の特殊的認識は、必ずやコンツエルン問題に關する考察、殊に下位概念としての特殊コンツエルンの問題に關する考察に資益し、惹いて現代の我が國産業組織に就いての理解に對して、必ず何等か加へるところがあるであらうと思ふ。

三 財閥的大コンツエルン の諸特質

財閥的大コンツエルンに就て

(1) 其の構成の基本的契機。我が國の財閥的大コンツエルンに於けるコンツエルン體系内所屬諸企業への統一的管理可能な基礎たる基本的契機は、諸企業に於ける投下資本に對しての究極的支配に關する共同性に存してゐる。即ちそこでは、諸企業の株式の決定的部分の究極的所有の共同性と並びに諸企業に供與されて決定的勢力を占めてゐる信用資本の根本源泉の共同性ととの二重的紐帶によつて、少くとも名目的にはなほ獨立的地位にある多數の企業が、一つの最高機關の手によつて統一的管理の網の中に包攝されてゐるのである。

即ち、一つの財閥的大コンツエルン網内の諸企業への統合的管理の基礎は、純産業資本的支配力と金融資本的支配力との結合的勢力にあるといへる。ただこれだけのことならば、それは財閥的大コンツエルンに特有の現象ではないけれども、他に此の點に關しての我が財閥的大コンツエルンに於ける注目すべき特質が存してゐる。それは、その從屬諸企業に對する統合的管理の基礎的紐帶をなせる資本支配の共同性が、究極に於

ては、夫々單一の金權的豪族が掌握してゐるところの一巨大所有に向つて完全に排他的に歸着し還元してゐるといふことである。

一般にコンツェルン體系に於ける最高管理の機能を擔當するものは、或は單なる持株會社であつたり、或はそれ自らも産業若くは金融業等に從事する事業會社であつたりする。しかし、今日歐米に於ける代表的なコンツェルンに見る普通の事實としては、其の最高指導の機能に當るべき究極的地位にある會社の所有權は社會の多數人の手に分散されてゐる。即ち、かかる場合には、龐大コンツェルンの統一的管理權も最後の段階に至つて或る程度に分散化され又は公開化されてゐるといふことが出来る。ハウスマンは其の種のコンツェルンのことを公開コンツェルン *objektivierte Konzerne* と呼んでゐる。歐米にも、コンツェルン體系に於ける最高會社の持分が一人又は一家族の手に集中してゐる例が無いではないが、かかるコンツェルンが夫々の國の國民經濟に於て占めてゐる地位は、我が國の代表的

な財閥的大コンツェルンのその如くに壓倒的なものではないのである。

なほ此の點に就ては、コンツェルン體系の最高管理會社に於て官公所有の資本が重要な部分を占め、それに基いてそのコンツェルンに於ける統一的管理が多分に官公權から直接の影響を受ける性質のもの即ちいはば官公的乃至官公的コンツェルン (*Öffentliche-und halb-öffentliche Konzerne*) と、我が財閥的大コンツェルンとの間に存する差異にも着眼する必要がある。

(2) 其の形成の發生期的動因。現段階にまで發展を遂げた儘の姿の我が財閥的大コンツェルンを形成してゐる本質的動因を具體的、總體的に眺めるならば、そこには多岐の要素を見出さざるを得ないであらう。單なる産業資本の投下様式の水平的及び、垂直的多角性、金融資本的活動的發展、分業的大量生産又は生産の芋蔓化的連結による經濟化等の生産合理化方策の追求、市場の獨占的支配の追求等が就中此の場合の重要な動因的要素として數え得られやう。ただこれに關し、歐米

- 3) 和田日出吉、三井コンツェルン讀本、133頁
西野喜興作、住友コンツェルン讀本、45頁
岩井良太郎、三菱コンツェルン讀本、201頁

- 4) Haussmann, F., Konzerne und Kartelle im Zeichen der „Wirtschaftslenkung“, 1938, S. 95 ff. なほ所謂コンツェルンの公開性に就ては、和田日出吉、日産

の組織式持株會社のコンツエルンに於ては最高持株會社の株主の一方的利益の爲に従屬諸企業的一般株主の利益を搾取することが重要な動因になつてゐると主張する者もあるが、我が財閥の大コンツエルンに就て同じことを明瞭に強調するのは困難である。

右に、我が財閥の大コンツエルンの現段階に於ける形成動因は多岐であると述べたが、しかし、此の種コンツエルンの發生期的段階に於ける形成的動因の本質的なものを求むれば、それは極めて單純である。ただ一つである。即ちそれは金權の豪族の手に蓄積される大規模自己資本の投下様式の水平的垂直的多角化に他ならない。

ここで、自然に問題になるのは我が財閥の大コンツエルンの中心を成してゐる金權の豪族の手に蓄積されたる右の基礎的巨大大資本の成立の由來である。抑々、これらの諸金權の豪族はその始め、徳川封建時代の後期或は初期資本主義時代から、當該豪族の純粹一家的事業として一定部門の企業的事業（商業、金融業、鑛山

財閥の大コンツエルンに就て

業、海運業等の或るものにつき）を營んでゐたものであるが、それが國民經濟の資本主義的發展、政府の手による特惠的助成、事業運營の巧妙性等の諸條件を契機にして、累積的に膨脹する巨大規模の自己資本の形成に成功するに至つたものである。⁵⁾ その累積的蓄積の自己資本は積極的膨脹の內面的要求に驅り立てられて、新投資路を追求するに至るのだが、そこに政府の特惠的助成も同時に作用して、それらが動因になつて初期段階の資本家の活動に成功せる金權の豪族を中心の基盤とせる新規企業の建設が八ツ手の葉を開くが如くに相次いで起つて來た。かくして、發生期段階の發達を遂げ得たる財閥の大コンツエルンは、其の後には自己の體系内に包攝せる金融的事業による金融資本的活動の發展と加速度的に擴充強化される産業資本的活動との二重的紐帶によつて子會社、孫會社を増殖しつゝ、際限無き自己膨脹を續けて龐大規模の現段階にまで到達した譯である。其の現段階的觀察に於てはそこに、其の形成動因として種々の契機を認め得られること前述せる

第五十卷 一三五 第一號 一三五

コンツエルン讀本、71頁以下參照

5) Vgl. Haussmann, F., a. a. O. S. 104 ff.

6) 高橋及び青山、日本財閥論、47頁以下
西野喜與作、前掲、16頁參照

通りである。しかし、少くともこれが發生期段階に於ては、今日歐米のコンツェルン構成に於ける形成動因として最も重要視されてゐるところの、生産の合理化乃至は又市場狹化への獨占化的對策といふが如き契機が、我が財閥の大コンツェルンの場合に本質的形成動因としての役割を演じたものでないことは注意せねばならぬ。佐友コンツェルンの形成動因には稍特殊の趣があつて、多分に廣義に見ての生産合理化的色彩が認められるとの説もあるが、それでも、それは、歐米のコンツェルンに就て最も普通に見られる如く、當初は名實共に相互に獨立して存在したる諸企業が生産乃至市場の合理化的要求に驅られて求心的に結合體系を形成してそこにコンツェルンの構成を生ずるに至つたのとは大いに事情が異なるのである。

(3) 其の包攝部門。我が財閥の大コンツェルンは其の支配する巨大規模の純產業資本と金融資本との二重的紐帶によつて各網狀的體系内に莫大數の有力諸企業を包攝し、最高管理會社以下、直系會社及び傍系會社の

二系統的中心を以て多數の子會社、孫會社を統率し、其の内容の層々累積する龐大な企業集結體系を構成してゐる。而して、こゝに於て最も注目すべき點は、それらの多數連繫企業の從業部門が、銀行信託保險等の金融業、各種重輕工業、鑛山業、貿易業、內國商業、倉庫、交通業、拓殖產業等、現代我國に行はれてゐる經濟事業の殆んど全分野に涉つてゐるといふことである。殊に、我が財閥の大コンツェルンに於ては其の網狀體系内に有力な金融事業が重要な地位を以て包攝されてゐて、それによる金融資本的活動の發展が大コンツェルンの構成上に基本的紐帶の威力的機能を發揮してゐるといふ事實を最も重視しなければならぬ。

とにかく、我が財閥の大コンツェルンの夫々の活動分野が現代我國經濟に於ける殆んど全部の事業部門に涉つてゐるといふことは甚だ重大な特質現象であつて、それは、今日歐米に於ける代表的大コンツェルンの多くが何等か特定種類の産業又は事業部門を中心として其の範圍内の諸企業の水平的及び垂直的結合體系

7) 西野喜與作、前掲、15頁以下

8) たとへば三井コンツェルンに就て、和田日出吉、三井コンツェルン讀本、附錄參照

9) 和田日出吉、三井コンツェルン讀本、143頁以下參照

を形成してゐるのと比べて顯著なる對照をなせるものである。即ち、我が財閥の大コンツエルンは化業工業コンツエルン、紡績工業コンツエルン、鐵工業コンツエルン等々の特殊産業部門のコンツエルンとは大いに趣の異つた性質を持つてゐる。これは前述せる如く我が財閥の大コンツエルンが其の形成動因に就て特殊性を持つてゐることに因るところが大きいと認められる。

(4) 其の管理組織に於ける人的要素。我が財閥の大コンツエルン内の管理系統殊に最高指導部に於ける管理組織を構成する人的要素に就ては、次の二點の特質を指摘することが出来る。一は大コンツエルン構成の本質的紐帶たる資本への究極的支配の地位を占める夫々の金權的豪族の成員が實質的には殆んど現業管理の機能から引離れてゐて、それをいはゞ吏僚的使用人たる人的要素が委託されて代つて擔當してゐるといふことである。二は、かゝる吏僚的使用人が、殆んど總ての部門に涉つて廣汎なる分野を占める龐大規模の集結的

財閥の大コンツエルンに就て

企業體系内に從業する無數の吏僚的使用人中から其の人物、經歷、技倆等の諸點に關する公正嚴密の審査を基礎にして選擇的に採用されるといふことである。右の二特質は必然的に、財閥の大コンツエルンの管理組織内の人的要素に、一般の獨立事業に於けると比較して、事業運用上の最高可能的適能者を得せしめる機會を多くしてゐるといふ結果を導く¹⁰⁾。尤も、此の點に就ては財閥の大コンツエルンの巨大資力と特別に強力なるその収益性に基く使用人待遇の特殊好條件といふ事情をも併せ顧る必要があるであらう。以上は一般の單純資本主義的コンツエルンとしての特色を見たのであるが、財閥的大コンツエルンが國民經濟上の重大要素でありながら前出の官公的コンツエルンに於て可能なるべきやうな、管理組織の人的要素の設置に就て官公權の直接的干與が全くそこに動いてゐないといふ點を一つの特質として茲に指摘して置くことが必要であらうと思ふ。

(5) その管理に於ける中心的指導原理。我が財閥の大

10) 高橋龜吉、日本財閥の解剖、22頁以下參照

コンツエルンの管理に於ける中心的指導原理が資本家的精神であり、而してその原理の實踐が其の管理者達の卓越せる事業運営の技倆によつて終始巧妙且つ忠實に追求されて來たといふことは事實である。しかし、此の點に就ては、更に我が財閥的大コンツエルンを一般の歐米大コンツエルンと對比したる場合の特質的現象として、次の諸事情に着眼する必要がある。即ち、

(一) 我が財閥的大コンツエルンは究極に於て、一般の大衆株主にも、又少數特定の個人にも從屬してゐるのではなく、それは實に個人をも又或る意味で家族をも超越したる一つの『家』に從屬せるものであること、(二) その『家』には凡て一定の家憲と呼ばれる一家の私的根本法があつて、それは『家』の成員たる各個人は勿論更に或る程度にはその主要使用人をも拘束してゐるものであること、(三) その『家』は豪族的地位に伴ふ必然の結果として常に國民的社會内に於ける注視の焦點に立たされてゐて社會的批判に對し明白にして直接なる具體的對象を構成してゐることは、一般の株式會社に於

て株主がいはゞその抽象的性格の故に屢々社會的批判の具體的對象たる地位から逸脱してゐるのとは多少趣の異なる事情を持つといふ諸點がそれである。

かくて、以上の契機から制約されて、我が財閥的大コンツエルンは特定個人又はその集團の放肆無節制なる利潤追求欲に専ら奉仕することを許されずして、一方に於ては其の財閥的大コンツエルンの活動の國家及び社會に對する意義乃至影響をも併せて適當に考慮しながら、これをして堅實なる節度を以て、その眞實の主人たる『家』の長久的發展の爲に奉仕せしめるといふことがその管理者達の中心的指導原理になつてゐるといふ事情を生じてゐる。なほこれに就ては、我國に於ける傳統的『家』制度、我が國に於ける特有の宗教的及び道德的雰囲気、財閥的大コンツエルンの我國經濟及社會に於ける壓倒的支配力の地位等がその緣由的契機を成してゐるといふべきであらう。とにかく、我が財閥的大コンツエルンの統合的管理の中心的指導原理の根柢には少くとも現段階に於てこれを原則的に見る

かぎり、單なる抽象的の資本家的精神の他に多少の異質的要素が混合されてゐると見るべきでなからうか。

四 結 言

現時の我が國民經濟に於ては、時局若くは強權的國策遂行の影響下に、産業の編成替乃至は經濟變質化の顯著なる現象が強力的進行の過程にある。これに伴つて又種々の重要問題を續發せしめてゐるのである。かゝる際に、我が國の産業構成殊にはそこに於ける重要契機たる財閥的大コンツエルンは當然に眞摯なる學術的再検討の一對象とならねばなるまい。従つて又種々なる改革的提案も問題になるであらう。我が國民經濟の健全なる發達を追求する實踐學的見地に於て、以上の如き本文の考察が何等かの學術的意義を含み得んことは、茲に私の冀求し來れるところである。